健康ホットライン

市立病院の医療コラム㉝

「病は気から」について
―個人的体験で感じた、複雑で単純な自分―

笠間市立病院　石塚恒夫

ゴールデンウィーク前日の朝、目を覚ますと左前胸部に鈍痛を感じました。左腕を動かすと痛みが強くなるので、筋肉痛かと思いました。しかし、午前中は超音波や内視鏡の検査を行い、午後は外来で診察をしていても、なかなか痛みは良くなりません。そうしているうちに今度は左背部も痛みだし、段々不安になってきました。心筋梗塞では、左の背中・腕・下顎などの心臓から離れた特定の場所に痛みが放散することがあるからです。「冷や汗をかいているわけでもないし、呼吸が速くなっているわけでもない。」と、医者としての自分は冷静でした。しかし「もし心筋梗塞なら家族はどうなるだろうか。病院はどうなるだろうか。」などと、家庭人や院長としての自分が騒ぎました。外来患者の診察終了後、念のために心電図とトロポニンT迅速血液検査を行いました。心筋梗塞等の異常所見はなく、大変安心できました。その夜は医師会の理事会に出ましたが、帰る頃にはいつの間にか痛みは消えていました。

病気の症状は、身体的な要因だけでなく心理的・社会的要因の影響も受けるのです。不安やストレスで痛みが増幅されてしまうことは、日常診療でもよく観察されます。例えば手の甲を指でつねって、そこをじっと見つめてみてください。あなたが見つめている限り、その痛みはずっと消えないはずです。しかし何か別なことをやり始めれば、その痛みは消えるでしょう。今回は自らの身体で、痛みの複雑さと単純さを再認識することとなりました。

診察の結果「大丈夫だから経過を見ましょう」と話しても、患者さんがまだ不安そうにしていることがあります。他に危険な徴候がないので意味がないと思っても、簡単な検査を行うことがあります。不安を軽減することで、痛み→不安→痛みの増強という悪循環が断ち切れると思うからです。

笠間の歴史探訪12

明治天皇行幸記念碑

宍戸駅前のロータリーの中に、「駐蹕記」と題する記念碑があります。駐蹕とは、天皇が外出（行幸）されたときに一時滞在されることを意味します。上部の篆書体の「明徳」の文字（篆額）と文章は、西茨城郡長遠山千里の手になり、書は宍戸町長鈴木重嗣によるものです。明治四十年（一九〇七）に宍戸町の有志が建立しました。

明治天皇は、同二十三年十月、岩間村の室野原（笠間市）・園部村の成井原（石岡市）で実施される近衛師団の演習を統監されるため、二十六日に水戸市の行在所へ入られました。常磐線が未開通のため、小山駅経由で水戸鉄道を利用されました。翌日、水戸駅より列車が宍戸駅へ到着すると、町長はじめ多くの町民や小学生らが整列し、「君が代」を合唱してお迎えしました。天皇は小休止されたのち、室野原の演習地へ向かわれました。その日は水戸の行在所に宿泊なされ、二十八日は成井原での演習と観兵式に臨まれました。

この演習に同行された皇后の十月二十七日の日記を、口語体に改めて紹介します。

天皇は、汽車で宍戸駅まで行かれました。そこから金華山という名の愛馬に乗られ、随従する有栖川宮・北白川宮や大臣・政府高官そして近衛の将校たちも、馬でつきしたがいました。私（皇后）は馬車で行きました。

岩間村に達した頃、あちこちから煙がたちのぼり、砲声がきこえてきました。近衛師団は両陣営に分かれ、各々赤・白の旗を風になびかせ、馬の鳴き声もここかしこからきこえてきました。両軍の戦いが頂点に達した頃には、砲声が絶え間なく響きわたりました。天皇は心をはずませ、別の方にお馬を進められ熱心に演習をご覧になられました。（中略）終了の報告がありますと、天皇は御野立所にしばらく休息され、再び宍戸駅から汽車で行在所へ帰られました。

行在所とは天皇の外出時の住まいのこと、御野立所とは天皇や貴人の野外の休息所のことです。

また、天皇が休息された岩間下郷の地に、記念碑と「明治天皇御野立所」の碑がひっそりとあり、当時のことを今に伝えています。

（市史研究員　幾浦　忠男）

宍戸駅前に建つ
明治天皇行幸記念碑